



災害に備える小さな灯火 (空き缶コンロ炊飯講習)



岐阜県女性防火クラブ運営協議会
会長 杉山 洋子

もう17年も前の話になります。

当時、東海地震が切迫していると叫ばれ、私の暮らす町は県内で唯一、地震の強化地域になっていました。今は、南海トラフ地震の発生が懸念されています。そして、あの忌まわしい東日本大震災が発生してしまいました。

私達女性防火クラブには、災害に備える自動車もありません、ポンプもありません、防災備品もありません。活動を支える予算が少しだけ。しかし、防災を目的としたクラブ員がいます。地域に支えられたクラブ組織があります。家族と地域を愛するウーマンパワーこそ女性防火クラブが持つ最大の財産であり、力です。災害は突然やってきます。尊い命を、大切な財産を、そして人の心まで奪ってしまう。殺伐とした状況の中でも生き抜かなければなりません。

人が生活するために必要なこと「衣・食・住」しかし、災害はこの基本的な生活基盤を一瞬に奪い去ってしまいます。私たちは災害の発生直後から復興に向けて歩み出さなければなりません。「生きるために……」

「食」は生きるために必要不可欠です。災害復興の第一歩は「食」とであると、温かい食事は、荒んだ心に「勇気」と「愛情」を芽吹かせることができる。私は女性としての感性から「空き缶コンロ炊飯」に取り組みようと決意をしました。「家庭と地域を守るために……」

さっそく見様見真似で取り組みました。



ふっくらと炊き上がったご飯

毎日何度もご飯を炊いてみました。失敗の連続でした。そんなご飯を毎日食べさせられていた私の愛する家族は、食の修羅場となっていたようですが……。

使用済みのてんぷら油を燃料にするのですが、何度試しても鍋底が真っ黒になってしまう。原因追求の繰り返し。燃料を燃やす芯の長さが原因でした。私の作成したコンロは、芯が長く不完全燃焼となっていました。芯の長さを三ミリにして炊いたところ、ふっくらと美味しいご飯が炊き上がりました。空き缶、ティッシュペーパー、使用済みのてんぷら油があれば



笑顔で試食タイム

簡易のコンロができるのです。私の心は感激と達成感で満たされました。近所のお母さん達に「こんな簡易なコンロでご飯が炊けるから、味噌汁もできるし……やってみてよ。」と紹介しました。

市民が覚えて活用してほしいと思い、各地区のクラブ員に呼びかけました。このことが、大きな飛躍のきっかけとなりました。クラブ員自ら実証し、作成手順を一コマコマ写真撮影した、素晴らしいテキストが出来上がりました。そして県内各地へと「空き缶コンロ炊飯講習会」が広まっています。このテキストが岐阜県の公式ホームページに掲載されています。ブラウザの検索エンジンにて「岐阜県 空き缶こんろ」で検索していただければヒットします。読者の皆さんもぜひ「空き缶コンロ」に挑戦してください。

小中学生、少年消防クラブの研修で、地域の防災訓練で、ことある事に出向き「講習会」を開催しました。「こんな小さな炎で、美味しいご飯が炊ける」その都度、感嘆の声があがります。今では年間五人超えの県民が挑戦しています。

全国女性消防団員活性化大会に、女性防火クラブのブースが設置され、「空き缶コンロ炊飯」のデモンストレーションを



小学校の授業で「空き缶コンロ」でカレー調理



寸劇で「空き缶コンロ炊飯」を紹介

する機会を得ました。全国の参加者から大きな関心を寄せられたのは言うまでもありません。

こんな嬉しい事例が寄せられました。

大雪災害に見舞われ、ライフラインが途絶えた山間地域での出来事です。一人住まいのお年寄りが、「空き缶コンロ」を作り、そのコンロでお湯を沸かし、ペットボトルを湯たんぼの代わりとして極寒の夜を温かく過ごされたそうです。

このお話を伺ったとき、私は鳥肌が立つ思いでした。「私たちのやってきたことは間違いではなかった。」感動と共に自信へとつながりました。

「災害復興の第一歩を」との考えから「空き缶コンロ炊飯講習会」を推進してきました。そしてあることに気が付きました。参加者が皆笑顔なのです。他人同士が楽しそうに声を発しながらコンロを作っています。それは人と人との繋がり「絆」助け合う心「愛情」行動する「勇気」生きるための「挑戦」だったのです。それこそが災害復興に向けて必要なことと気付かされたのです。

私達の活動が大きな渦となって日本全国に広まることを期待しています。